

音楽高校における英語授業の取組と成果

瀧澤典子

1. はじめに

本校の『研究紀要』第15集に掲載された「英語スピーキング能力向上のための指導研究」(瀧澤、2019)において、筆者は、2017年夏にイギリスの語学学校において実施した、英語学習者のスピーキング・コミュニケーション能力向上のための指導に関する調査研究結果を報告した。その拙稿において、英語の文法や語彙などの基礎知識が確立されていない日本人大学生が大半のクラスを指導するにあたり、現地教師らはどのような点に留意し、工夫をしているのか、また学生らはそれをどう感じているのかを分析した。その結果、教師が、学習者をはじめとするさまざまなニーズに日常的に耳を傾け、柔軟かつ創造的に実践に反映させていくことで、より学習者に適した、効果的指導を行うことができるのではないかという考察に至った。

本論では、この調査研究から得たことを念頭に、筆者が日本の音楽高校に着任して以来3年間続けて担当してきた、「コミュニケーション英語」の授業(以下、A組)において、どのようにニーズを分析し、学習指導に反映させてきたかを報告するとともに、その成果を振り返る。

2. ニーズ分析

2.1 コース目標

『高等学校学習指導要領解説・外国語編 英語編』(文部科学省、2010、p.10)に記載されている、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」の各目標を参照し、「読む」・「聞く」・「書く」・「話す」4技能を統合的に用いた言語活動を積極的に行うことで、社会生活において活用できるようなコミュニケーション能力を育成することが一貫した趣旨であると理解した。

2.2 生徒のニーズ

本校の生徒の多くは、将来、プロの音楽家になることを志し、当然のごとく、国際的な舞台上で活動することも視野にある。2018年4月、A組の全生徒9名に実施した授業前アンケートでは、高校卒業に必要な単位の取得はさることながら、全員が、留学や仕事のために一定の英語力が必要であると回答している。また、海外を含む希望進学先の入学条件として求められる語学検定レベルや大学入学共通テスト等の点数獲得を学習の動機としている生徒も2名いた。このように、各生徒が英語学習について短期的および長期的目標を持って授業に臨んでいることが分かった。なお、A組は次年度4月に、それまでの成績や授業での取組、適応性、本人の意思を確認した上で、同学年の生徒1名を増員し、10名とした。当該生徒も将来、大学進学そして海外留学を希望し、他生徒と英語学習の目標を共有していた。

A組の生徒らの英語能力レベルは、本校入学時に実施した学力調査結果等から判断すると、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment：外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠）のA2からC1で、英語の語彙や文法などの基礎的な知識についても、少なくとも中学校で学ぶ内容は概ね習得していた。さらに、英語圏地域からの帰国生が2名おり、また、中学校時代、英語で会話活動をたくさん行った経験のある生徒も大半を占め、当該クラス全体的に、英語を使ってコミュニケーション活動をすることに抵抗感が少ないよううかがえた。そして、授業前アンケートでは、全員がスピーキング能力を伸ばしたいと回答しており、英語スピーキング・コミュニケーション能力をさらに向上させたいというニーズが高いことが分かった。実際、授業を行っていく中で、いわゆるコミュニケーション能力（communicative competence）のいくつかある要素のうち（Savignon, 2002）、場面や状況に応じた表現を用いる社会言語能力（sociolinguistic competence）と、文脈に沿った効果的な文を作り出す談話能力（discourse competence）は、文法的能力（grammatical competence）や方略的言語能力（strategic competence）に比べて、向上の余地が見られた。

2.3 学校のニーズ

本校では、1年次から3年次まで「コミュニケーション英語」は3単位である上、音楽実技試験やさまざまな学校行事で授業時数が限られる。よって当該科目では、検定教科書を用いて読解を中心とする授業を行い、コミュニケーション能力の土台となる語彙や文法、正しい発音、日常会話表現等の学習指導は、1年次と2年次に2単位、3年次に3単位ある「英語表現」の授業で行うこととしている。なお、3年次については、当該科目の授業は9名ないし10名の少人数クラスから40名前後の大人数クラス編成となり、大学入試に向けた指導が優先される。後期からは、大学入学共通テスト対策用の副教材を用いた問題演習が中心となる。

また、本校の生徒は、授業時間外の大半を音楽実技のレッスンや練習に費やし、多忙を極めている。そのため、普通教科については、より効率的に勉強をする必要がある。そこで、外国語科では予習より復習を重んじ、「コミュニケーション英語」の教科書のレッスンごとに、書き込みのできる冊子⁽¹⁾を作成し、生徒はそれさえあれば授業で学んだ内容をすべて確認できるようにしている。他方、教員側も、新しいレッスンに進むごとにこの補助教材を作成する過程で、全体の流れやポイントを確認し、導入方法を練る機会としている。

2.4 学習指導要領とSGH事業のニーズ

本校では、2016年度より文部科学省によるSGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校として、国際的に活躍する芸術家、すなわち「グローバルアーティストを育成するための教育プログラム」の研究開発を行っている。それを支える5つの研究課題としてグローバル・プラクティス、グローバル・コミュニケーション、グローバル・キャリア、グローバル・マネジメント、グローバル・リテラシーがあり、そのうち2つ目の「グローバル・コミュニケーション」は外国語科が主体的に取り組んでいる研究課題である。将来、言葉の壁を乗り越えて音楽家としての活躍の場を広げられるよう、生徒の語学力強化を目指し、英語科目については習熟度別授業を展開している。そのうち上位層から成るA組は、大学側の協力を得て高大連携授業を受講して

(1) およそ20-30頁から成り、新出単語リスト、テキスト本文、内容確認問題、復習小テスト、要約、訳付き音読シート、トピック関連記事、ディスカッションメモ、ライティングノートなどを含む。

いる。それに伴い、「コミュニケーション英語」の3単位のうち1.5単位は東京藝術大学言語音声トレーニングセンター（以下、音トレ）の講師による、スピーキング・コミュニケーション能力向上のための英会話クラスに割り当てられている。よってA組では、定期考査に向けて他クラスと進度を合わせるために、授業内容を取捨選択、かつ凝縮させると同時に、ディスカッションやディベートなどを組み込み、より発展的な学習指導を行うことも求められている。

加えて、上記5つ目の要素「グローバル・リテラシー」に関しても、それが教科横断的学習の性質を帯びているため、外国語科が寄与できる分野である。『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』において、「コミュニケーション英語Ⅰ」について、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成にも資する題材や内容を選択的に取り上げ、体系立てて扱うこととする」（文部科学省、2010、p.4）と記されていることから、本校の場合、SGH事業の主眼であるグローバルアーティストの育成に鑑みて、教科で扱う題材や内容を系統立てて選ぶことが望ましいと考えられる。実際、本校が「コミュニケーション英語Ⅰ」で使用している教科書、『PRO-VISION English CommunicationⅠ』（田中茂範・武田修一他、2016）を参照すると、学習言語の構造や意味、機能の理解に留まらず、科学技術の発展や異文化理解、歴史等、取り上げられている題材や内容は多岐にわたる。これらすべてを扱うことは、授業時数の限られている本校であればなおさら難しく、従ってグローバルアーティストを育成するという観点から、それに資するものを選択し、授業者が体系的にシラバスを編成することが求められていると考える。

さらに、当該事業ではSDGs（持続可能な開発目標）をはじめ、さまざまな社会課題について理解を深め、自ら解決策を見出す知恵を養うことや、それに基づき自分の考えを効果的に表現する力を養うことも求められている。この成果は毎年開催される「全国高校生フォーラム」でのポスターセッションで発表をすることになっており、英語で発表する都合上、外国語科が指導を担っている。よって、この研究発表のための布石を打つことも、教科で扱う内容を選択する際や授業を計画する際に、考慮すべき点となる。

2.5 ニーズのまとめ

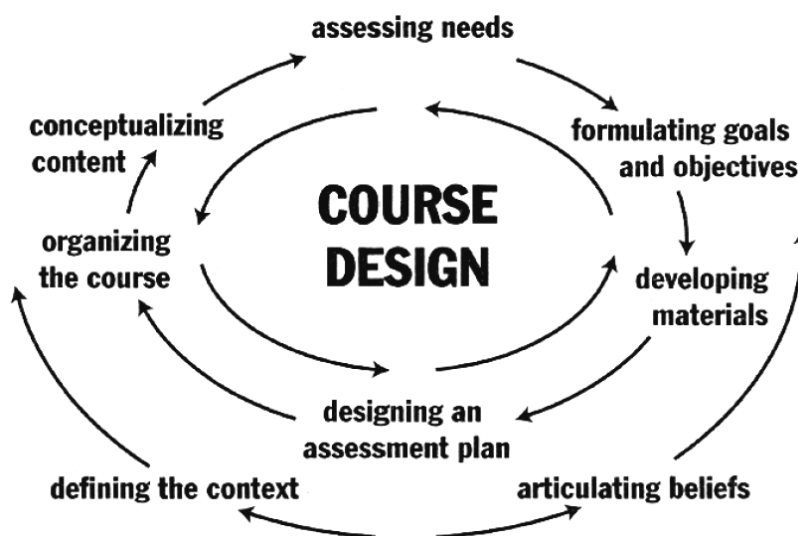
以上の事柄が、筆者が「コミュニケーション英語」の授業を計画する際、留意すべき点として念頭に置いている生徒、学校、およびその他のニーズである。試験通過や資格獲得のみならず、将来グローバルアーティストとして活躍する上で求められる英語コミュニケーション能力を身に付けること、また、限られた授業時数の中で社会課題についても触れていくことなど、さまざまである。そしてこれらを、SGH事業における研究開発分野の「グローバル・コミュニケーション」と「グローバル・リテラシー」に当てはめるならば、図表1のように大別することができるだろう。

コースを運営していく上で、さまざまなニーズを明確化し、バランスよく学習指導に反映させていくことが、学習者により適した効果的指導を行う上で一つの重要な手立てとなる。そして、Graves（2000、p.3）が図表2にあらわしているように、それはコース期間を通して日常的に行われることが前提とされる。次項では上記した本校におけるさまざまなニーズを踏まえて、筆者が「コミュニケーション英語」の授業において具体的にどのような取組を行い、どのような効果や改善点が見られたかを報告する。

図表1 「コミュニケーション英語」にかかるニーズ

	生徒	学校	学習指導要領／SGH事業
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	<ul style="list-style-type: none"> ・語学検定や新共通テストの必要点数を獲得する ・英語スピーキング・コミュニケーション能力を向上させる ・留学や仕事で使える英語力を身に付ける ・社会言語能力と談話能力を向上させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書を用いた読解を中心とする授業を行う ・大学入試対策指導を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・4技能を統合的に用いた言語活動を行う ・自分の意見を効果的に述べる力を養う ・CEFR「B1」レベル以上の生徒を増やす
リ グ テ ラ バ シ ル	<ul style="list-style-type: none"> ・海外におけるレッスンや合奏で使われる音楽表現や音楽に関する専門用語を習得する 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会課題について理解を深め、解決策を見出す知恵を養う ・ポスターセッションでの研究発表に向けた布石を打つ ・「グローバルアーティスト育成」に資する内容や題材を体系的に扱う 	
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・効率的な勉強をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別クラスの進度を統一させる ・冊子を使う 	<ul style="list-style-type: none"> ・3単位のうち1.5単位を高大連携授業に充てる

図表2 ニーズ分析とコース展開の関係 (Graves, 2000, p. 3)



3. 実践

3.1 スピーキング・コミュニケーション能力の向上

スピーキング・コミュニケーション能力向上のための活動は、高大連携授業でも行われていたが、英語で話すことに慣れ親しむためのゲームやペアワーク等のコミュニケーション活動が主であった。よって、「コミュニケーション英語」の授業では、教科書の本文で使われている表現を辞書や文法書を用いて例文を詳しく調べることで、単語の作りや語源、語法などをより深く学ぶ機会を設けた。筆者は生徒の質問や発言に応じて次の授業までに資料を作成し、授業内で確認を

行った。例えば、類似表現の微妙な意味の違いなどに気づき、調べることで、テキストないし発話の意味をより正確に理解する能力が養われた (fine tuning)。そして、実際の会話場面において、言葉の選択に迷いが生じないように、それらの表現を適切な文脈の中で実際に使ってみることで習得する機会も多く設けた。このようにして、社会言語能力や談話能力の伸長を図った。

さらに、教室の座席を緩やかなU字型に配置することで、互いの顔が見えるようになり、生徒間のコミュニケーションが活性化し、協同的に学び合う雰囲気が保たれた。また、これにより、歴史や文化、社会課題など、それぞれの興味関心や得意分野に任せ、情報共有する場面が増え、発展的な学習にも繋がった。しかし、高度な内容になると、生徒は日本語で発言しがちになるため、教師が英語で適切な表現をさりげなく例示する (recast)、あるいは、後から修正点を指摘する (delayed corrective feedback) などの方法により、生徒の英語表現力の向上を促した。

また、毎回授業の始めには、ウォームアップとして、身近な話題について、生徒同士が英語でやりとりをする時間を設けた。1年次には、教師側から Yes / No で答えられる質問を投げかけ、それについて生徒がペアで意見や理由を簡潔に述べ合う活動を、2年次には *Asahi Weekly* に掲載されている「100語ニュース」を読み、それぞれ隣の人に記事の概要と感想を伝える活動を行った。会話が途切れないよう、ワークシート⁽²⁾にはあらかじめ5つの質問を付記しておき、生徒はそれに沿って話をできるようにした。いずれの活動も、ペアワーク後にクラスで情報共有することで、学び合いが可能となり、生徒にとって、多角的視点を養い、関連する事柄についても知見を広げる機会となったであろう。特に2年次に行った英字新聞速読の活動は、TOEFLやIELTSの受験を控えている生徒らに好評で、それ以外の生徒らも、興味を引く記事の話題に会話を弾ませていた。なお、このウォームアップ活動において、筆者は文法的誤りを指摘するよりは、さらに話題を提供するなど、会話を促すことに注力した。より実践的なコミュニケーションの場面で求められる方略的能力の伸長を優先したためである。

3.2 教科書の読解

2.3に既述の通り、教科書で取り上げられている題材や内容は多岐にわたり、授業者が取捨選択する必要がある。その際、生徒の興味関心や社会の動向に加え、分野や文章形式に偏りがいかどうか等、さまざまな留意点がある中で、筆者は生徒と学校、学習指導要領あるいはSGH事業のニーズを包括する「グローバル・リテラシー」に関するニーズ(図表1)を優先的な判断基準とした。なぜなら、「グローバル・コミュニケーション」や「その他」のニーズ(図表1)については、扱う課にかかわらず応えていくことが可能であったからである。よって、1年次から3年次に授業で扱った課は図表3に記載の通りである。各課の指導計画を練るにあたり、同表に挙げられているようなキーワードを、グローバルアーティストを育成すべく「グローバル・リテラシー」のニーズに照らし合わせつつ体系的に授業に織り込むことを常に配慮した。

また、A組では、音楽実技練習の時間確保にも配慮し、予習を前提とした授業を行わなかった。実際、このクラスの生徒たちが目標としている語学検定や大学入試、留学等においては、スキミング法やスキッピング法を用いた速読力が求められることの方が多く、初読の文章を限られた時間で読みこなす力を養うことが優先される。そこで筆者は、授業の大まかな進行を考える

(2) 毎回、「A」と「B」2種類のシートを用意した。それぞれ異なる記事のコピーを貼り付け、その下に5つの質問を記した(1. What is the story about? 2. When/Where did/will it happen? 3. What exactly happened / will happen? 4. What is noteworthy? 5. What do you think of this news?)。

際、アカデミック・リーディング法の一つであるSQ3R法⁽³⁾を参考にし、緩急をつけた読み方を教授するよう配慮した。ただし、時間的にも制限のある「コミュニケーション英語」の授業においては、多くの場合、課の導入段階において“survey”と“question”の過程を統合させていた(図表4)。

まず、扱うトピックに関する質問を筆者から生徒たちに投げかけ、自分たちにとってその話題が何を意味するか(personalization)、また、それと同時に連想される知識や経験をクラス全体で共有した(schema activation)。これを踏まえ、筆者は教科書の本文でポイントとなる箇所に付随した質問をさらに投げかけ、生徒らはその答えを探すべく、制限時間の中で教科書本文を読んだ(first reading)⁽⁴⁾。そして、質問の答えを確認した後、詳しい内容を把握するために、教科書の欄外にある内容確認問題や教師のさらなる質問に生徒が答えるという問答法で文章を読み進め、文法や語彙の確認なども同時に行った(second reading)。なお、このsecond readingにおいては、課の導入段階において生徒間で情報共有した話題や疑問にも触れ、それを文章の内容と結び付けていくことも心がけた。そうすることで、生徒らとテキスト本文との間で思考と対話が生まれ(interactive reading)、授業中、発展的な学習に繋がるような、生徒たちのさらなる反応を聞くことが可能となった。また、この“read”の過程において、筆者は文章の要旨を図式的に板書し、“recite”や“review”の段階で、生徒が自分なりに英語で概要を説明する(retelling)などの会話活動の際に活用した。

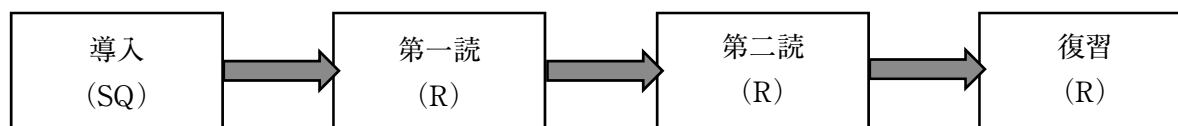
図表3 「コミュニケーション英語」の授業の取組

	授業で扱った教科書の課	題材のキーワード	発展的活動
1 年 次	(前期) Lesson 1 The Power of Vision and Hard Work Lesson 2 Oh Bento! Lesson 4 Beavers, Engineers of the Forest (後期) Lesson 5 Chocolate: A Story of Dark and Light Lesson 6 The Power of Music to Change Young Lives Lesson 7 Talking Plants	生き方、再生医療 日本食、日本文化の海外発信 森の生態系、動物保護と共生 古代文明、植民支配、児童労働 芸術と社会、音楽教育、才能 コミュニケーション、実証研究	語彙調べ学習 関連動画視聴 関連記事閲読 ディスカッション ディベート ライティング
2 年 次	(前期) Lesson 1 The Freedom to Be Yourself Lesson 6 The First Olympics (後期) Lesson 3 Mount Fuji—the Eternal Mountain Lesson 10 The Underground Reporters	生き方、価値観、多様性 古代ギリシャ、歴史、世界平和 信仰、世界文化遺産、芸術 戦争、ユダヤ人迫害、強制収容所	語彙調べ学習 関連動画視聴 関連記事閲読 100語新聞速読 ディスカッション ライティング 音楽家インタビュー
3 年 次	(前期) Lesson 10 Smart Machines and the Future of Jobs ※オンライン授業を含む Lesson 3 The Miracles of Fermentation (後期) 大学入試共通テスト対策教材	産業革命、AI、経済、職業 発酵食品、微生物学	スキヤニング スキミング 要点整理(図表化) リスニング

(3) まず章の見出しなどを中心に文章を概観し(survey)、それについて設問をいくつか立てる(question)、そして、その答えを見つけるために拾い読みする(read)、記憶している答えを自分の言葉で述べてみる(recite)、設問の答え以外の情報を整理し、復習する(review)という流れで文章を読む方法である。

(4) first readingの前に生徒は本文を見ずに一度、CDによる音読を聴いている(audio reading)。

図表4 SQ3R法を応用したリーディング



3.3 発展的な学習

一方、グローバルアーティストを育成するという観点から、洞察力、理解力、共感性といった素養を高めるために、教科書の題材に関連する記事や動画等を多く取り入れた。筆者は、*TED Talks* や *NHK World*、*Asahi Weekly*、*The Japan Times* 等、授業で役立つような情報資料を日常的に収集し、教科書本文の理解を深める助けとなるものや、異なる視点を与えるものは、Google Classroom で情報共有した。その多くは教科書の内容と合致していたため、補助教材として大いに活用することができた。また、これらの発展的な学習のまとめとして、各課の最後にはディスカッションやディベートを行った後、150語以上で自分の意見を述べる英作文⁽⁵⁾を課題とした。

さらに、2年次の秋には、国際的に活躍中のハンガリー人ピアニストを授業に招き、生徒による英語インタビューを行った。ここでは、「全国高校生フォーラム」におけるポスタープレゼンテーション発表を控え、一部の生徒が「総合的な学習の時間」においてすでに行っていた調べ学習のデータ収集を行うことともに、今まで培ってきた英語による会話能力を試すことが主な目的であった。生徒らは、音楽との向き合い方や舞台に向けた練習、音楽を通じた社会貢献等、プロの音楽家になることを目指し精進する者として日ごろ抱いている疑問を中心に質問していた。事後、オーチャードホールにて催された当該ピアニストのコンサートに招待され、A組からは4名の生徒が演奏鑑賞した。海外研修旅行先のハンガリーから帰国した数週間後に間を置かず実施したことで、生徒にとってより有意義な探究的学習の機会となったと察する。また、この活動を通して、大学進学後に求められる学術的な研究方法論の基礎⁽⁶⁾を学んだことも大きな収穫となったであろう。

以上のように、発展的な学習を通して、社会で起きている問題や出来事についてより深く知り、音楽家としてそれらとどう関わり、どのように社会貢献していくことができるのか、また、その際どのような障壁があるのか等について、生徒一人一人がさまざまな観点から考えるきっかけを提供した。

3.4 アンケート結果に基づく授業改善

筆者は、日常的に生徒とのやり取りから、コース内容の適正を推し量っていたが、新学期と前期末および後期末にアンケートも実施し、生徒のニーズに臨機応変に対応できるよう努めた。実のところ、前述のさまざまな言語活動、例えば、ウォームアップ活動としての「100語ニュース」の速読と情報交換や、文法書や辞書の調べ学習、英作文課題は、外国のことを詳しく知りたい、会話力をつけたい、語彙力をつけたい、自分で文を作り出すことができるようになりたいといっ

(5) 1年次の前半は、理解した内容を図にあらわす課題や、自分の意見と理由のみを2~3行の英文で説明する課題を出し、段階的に作文の量を増やしていった。また、学年が上がるにつれ、正確さに加え、表現の豊かさや構成力なども評価基準とすることで、相手に伝わる効果的な文章を書くことを生徒に意識させた。

(6) 研究の基本的な手順（テーマ設定、課題提起、調査、検証、分析、考察、展望）や質的研究・量的研究の違いなど。

た、生徒たちの要望をもとに取り入れたものである。また、学習方法について、こつこつ勉強するようサポートして欲しいという要望もあり、単語テストの実施回数や副教材の提出頻度を増やすようにもした。さらに、語学検定の受験予定を知らせてくる生徒も数名おり、個別に対応することができた。図表2において Graves (2000) が示している通り、より効果的なコース展開をしていく上で、継続的なニーズ分析と指導評価による振り返り、そして軌道修正が欠かせないことを実感した。

3.5 実践のまとめ

以上のように、「コミュニケーション英語」のA組にかかるさまざまなニーズの分析と指導評価、修正を繰り返しつつ、3年間、グローバルアーティストを育成すべく、段階的なコース展開を行ってきた。図表3の通り、1年次の前期では科学者の成功談や日本の食文化、動物の生態と自然保護など、比較的身近な題材を扱うことで、生徒が授業中に英語で意見や感想を述べやすくなった。また、生徒の発言をきっかけに、教師側がそれを掘り下げる補助教材等を提供することで、クラス全体で学びを深める環境を作った。そして、1年次の後期からは、児童労働や人種差別等の社会問題、芸術や思想といった抽象的な題材を扱い、それらと音楽との関連性を探究してきた。将来音楽家として、社会にどう貢献していくことができるのか、生徒がそれぞれのペースで考察を深められるよう留意しつつ、リテラシー分野の充実を試みた。さらに、発展的活動においては、アンケート等による生徒の意見や希望を反映させた言語活動を組み込み、各生徒のコミュニケーション能力向上をはかった。

4. 評価分析

4.1 民間試験結果およびアンケート結果

本校では、毎年末に英語民間試験を実施し、生徒の英語力の向上度を客観的に評価している。当該クラスの生徒が1年次の時は TOEIC Bridge を、2年次の時には TOEFL Junior を用いて計測した。1年次においては CEFR の B1 レベルの生徒が1名、A2 レベルが7名、A1 レベルが2名であった。それに対し、2年次と3年次においては B2 レベルが1名、B1 レベルが6名、A2 レベルが3名と、リスニングとリーディングのみについてはあるものの、指導を開始して1年後に確実な伸びを示し、その後も能力を維持した。なお、B2 レベルであった生徒は満点を獲得した。また、これとは別に、3年次になり、個人的に英語民間試験を受験した生徒3名が、IELTS スコア 8.0、5.0、TOEFL iBT スコア 77 を獲得し、東京藝術大学音楽学部への入学試験における優遇措置として、大学入試共通テストの外国語が「見なし満点」扱いとなった。これらの結果から判断し、図表1に記載されている「グローバル・コミュニケーション」のニーズの、スピーキングにかかる項目以外は概ね達成できたと言える。なお、スピーキングについては客観的に測定する機会を得られなかったが、通常授業での会話活動等において、とりわけ今ある知識を駆使して伝えようとする力、つまり方略的言語能力について、さらなる伸びが見られた。また、場面や状況に合った英語を使おうとする意識も高まり、従って、社会言語能力も養われたと言える。

他方、毎年度末に実施する授業評価アンケートにおいて、授業内容に満足しているかどうかの設問に対し、1年次と2年次のいずれも9名ないし10名中1名を除く全員が「そう思う」と回答した。その理由として、「毎時間とても内容が充実していると感じているから」、「授業内容ブ

ラスα（発展）を教えてくれるから」、「自分のレベルより少し上で頑張れるから」、「新しい視点や今まで気づかない見方が他の人から学べたから」、「わからなくても質問しやすい環境なのでちょうど良かった」、「すごく楽しく受けられるから」、「英語に頻繁に触れることができるから」、「テンポや文の説明も分かりやすくちょうど良い」、「分からないところが分かって面白い」、「授業とテストの内容が合っているから」、「実用的な英語表現を知れる」等のコメントが書かれていた。これらは、筆者が日々の授業において留意してきた点、例えば、生徒の発展的な学習や学び合い、主体的学びを促す環境づくりと呼応しており、ニーズに即した指導を心がけてきた筆者の取組に対し一定の成果が得られたと考えている。

4.2 今後の課題

なお、音楽高校ならではのニーズ、「海外におけるレッスンや合奏で使われる音楽表現や音楽に関する専門用語を習得する」（図表1）については未達成であり、今後の課題である。外国語科では、科学や医学分野等で用いられている英語教授法、ESP（English for Specific Purposes）を、音楽高校である本校の英語教育にも応用することを2年前から模索していた。音楽科教諭からも、外国人指揮者による本校のオーケストラ授業の録画DVDを借り、そこで使われている英語表現を抽出して教材開発を行うことも検討していた。また生徒からも、英語の音楽辞典や音楽専門書を紹介されていた。しかし、外国語必修科目の授業時数確保、大学入試対策、そしてSGH事業等のニーズが優先され、音楽高校の教育により則した英語教育教材の開発は、この3年間においては実現に至らなかった。また、このような音楽分野に特化した内容を扱う場合、音楽に関する専門的知識を要するため、音楽科の支援が欠かせない。それに鑑みて今後は、本校のカリキュラムとの整合性を精査するとともに、専攻や分野を越えた各所との連携を目指す必要がある。

本校は次年度以降、新カリキュラム開始に伴い、比較的柔軟な枠組みの中で、音楽高校により適した英語教育を展開していく可能性が広がる。例えば、外国語必修科目以外の時間に、さらに音楽の専門分野に踏み込んだ題材を導入していくことで、生徒が海外でのマスタークラスや合奏練習に参加した際に役立つ音楽表現や専門用語を英語で学ぶ機会を作ることができるであろう。今後、音楽高校の教育により則した英語教育を展開する上で、教師が日常的にニーズを察知し、それに合わせて題材や指導方法を随時選択していくこと、また教員間で連携して検討していくことが重要であると考えられる。

参考文献

和書

瀧澤典子（2020）、「英語スピーキング能力向上のための指導研究」、『研究紀要』第15集、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、（pp. 25-35）。

https://geidai.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=984&file_id=22&file_no=1（アクセス：2020年11月3日）

文部科学省（2010）、『高等学校学習指導要領解説・外国語編 英語編』。 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf（アクセス：2020年11月3日）

田中茂範・武田修一ほか（2016）、『PRO-VISION English Communication I NEW EDITION』、桐原書店。

———（2017）、『PRO-VISION English Communication II NEW EDITION』、桐原書店。

———（2018）、『PRO-VISION English Communication III NEW EDITION』、桐原書店。

洋書

Graves, Kathleen (2000) *Designing Language Courses: A Guide for Teachers*. Boston: Heinle & Heinle.

Savignon, S. J. (2002) 'Communicative language teaching: linguistic theory and classroom practice', in Savignon, S. J. (ed.) *Interpreting communicative language teaching: Contexts and concerns in teacher education*. New Haven: Yale University Press.